古代キリスト教とジェンダー：テクラ信仰：越境と自立の神話（概要）

Ancient Christianity and Gender:Thecla Cults-A Myth of Transgender and Autonomy

足立　広明*

Hiroaki ADACHI

昨年度においては今年度の短期在外研修の下見も兼ねて夏季にオックスフォード大学ボードリアン図書館において資料収集にあたった。同図書館は西洋古代史関係の図書資料収集で世界有数の規模を誇り、とくに報告者の研究テーマと関連するキリスト教史やその外典史料、研究文献に関して充実している。ごく短期間であったが、同図書館での資料収集は『ジェンダー史叢書』収録予定論文の完成に役立ち、また今回の研修に継続するものとなった。以下の報告では、同叢書収録論文の概要説明を中心に、今期の研修との連動性や今後の研究への展望を述べてみたい。

Ａ：論文概要：「古代キリスト教とジェンダー：テクラ信仰―越境と自立の神話」

ジェンダー史叢書と当該論文の位置づけ

本論文は全８巻から成る『ジェンダー史叢書』（うち現在４巻刊行）第７巻『人の移動と文化の交錯』の第１部「人の移動と宗教・文化」の第２章を構成するものである。第１章は「仏教の伝播とジェンダー」で、二大宗教成立とジェンダーの関係に関する論考が対比的に配置されている。このなかで報告者は初期キリスト教における女性の役割について、まず前半部分で『キリスト教証言書』（新約聖書）の女性像について詳細に論じ、ついで自らの長年の研究テーマであるテクラ信仰と女性のかかわりについて論じた。

『キリスト教証言書』における女性像は我が国でも荒井献氏の『新約聖書の女性観』（岩波書店、1988年）以来重要な研究テーマとなってきたが、その際現在正典聖書に収録されている文書群（四福音書、使徒行伝、パウロ書簡、牧会書簡など）とともに、現在は正典から外されているが、古代においては人々に正典同様に読まれていた外典文書群の存在も考慮することが公平な歴史的評価のためには不可欠である。外典文書のなかで『パウロとテクラの行伝』[1)] の主人公テクラは、このなかで聖母マリア信仰の台頭する以前に地中海世界各地で人気を博した女性で、最初はパウロに従いつつも後には彼からも自立し、闘技場で女性信者の声援を背景に自らに洗礼を施し、その後放浪して人々に宣教するなど、最初期のキリスト教における自立的女性宣教者の姿を彷彿とさせるものとして近年多くの研究者の注目を集めている。ジェンダー史叢書における本論稿は、

2010年９月10日受理　*文学部史学科准教授

福音書やパウロ書簡、牧会書簡の女性像とこの外典におけるテクラ像とを対比させつつ、最初期のキリスト教における女性たちの関与を跡付けようとするものである。

B：論文の構成と内容

1：構成

論文は次のような構成とした。

はじめに

1：『キリスト教証言書』における女性たち

2：『テクラ行伝』と牧会書簡（ストーリー・テリングと教会父権制）

3：『テクラ行伝』の表層と深層

4：古代末期におけるテクラ信仰と女性

おわりに

2：内容

次に各節を順に解説する。

はじめに

上述『パウロとテクラの行伝』第2部におけるテクラの自己洗礼場面とそれを危険視して断罪する3世紀の教父テルトゥリアヌスの発言[2)]を史料で対比しつつ、初期教会における女性の位置づけをめぐる矛盾と緊張関係を明らかにしながら問題提起を行った。

すなわち、テルトゥリアヌスの証言は、逆説的な形で彼ら教父の見解とは異なった女性たち独自のキリスト教伝統の存在を浮かび上がらせているのである。キリスト教は創造神も神の子である救世主も男性であり、彼らが等しく「神」とされるのに対し、母マリアは人間にとどまるなど根本的に男性中心の父権制的宗教である。しかし、その神学は最初から体系だったものとして矛盾なく完成していたのではなく、常に社会との関係の中で揺れ動いていた。とくに最初期のイエスの集団には女性たちが積極的に関与したことが福音書などから推測され、その伝統が継続していたことが『行伝』などのテクラ信仰関連の史料から判明するように思われるのである。そこで本論においては、初期キリスト教におけるジェンダー規範変容の問題を『キリスト教証言書』からテクラ信仰に至る女性の独自伝統のあり方を追うことで考察する旨、最初に問題提起を行ったのである。

1：『キリスト教証言書』における女性たち

ここではテクラ信仰に先立って、まず『キリスト教証言書』に登場する女性たちについて概観した。正典とされる福音書には数多くの女性の事績が記されているが、ここではとくにマルコ福音書7章24－30節における「シリア・フェニキアの女」と同じくマタイ福音書15章21－28節の「カナンの女」の信仰を取り上げた。それは通常の福音書のエピソードがイエスによる意表を突く発言に作中の聴衆と読者が驚き、真実に気づくという構成を取るのに対し、この「シリア・フェニ

キアの女」もしくは「カナンの女」のエピソードにおいては女の意表を突く発言で逆にイエスが真実に気づく形を取っているからである。

マタイ、マルコいずれの該当箇所においても、娘の病気癒しを願う異邦人の女に対してイエスはつれなく「子ども」（＝イスラエル人）のパン（救済）を取って犬（＝異邦人、異教徒）にやる者はないと言って下がらせようとするのだが、女は犬でもパン屑ぐらいは貰えるはずだと食い下がり、イエスの譲歩と娘への癒しを確保している。論文ではシュッスラー・フィオレンツァ[3)]やロス・シェパード・クレイマー[4)]の研究に依りつつ、ここに原始教団における女性の主体的な関与を読み取ることが可能であることを指摘した。

続けて本節では荒井氏などの研究に基づきながら、キリスト教の奥儀とも言えるイエスの磔刑から復活に至る場面の目撃証言が実は母マリアや、とくにマグダラのマリアら女性たちによってのみ行われており、ペテロら男性弟子はその間逃亡していたことを指摘した。

また、テクラ信仰とのかかわりではパウロの第一コリント書簡における女性信徒への服従と沈黙を執拗に求める場面が重要である。この箇所はさらにパウロの名による牧会書簡『テモテへの第一の手紙』において強調されることになるが、これも近年の研究ではパウロの前で沈黙せずに語る女性預言者の存在を間接的に証言するものとされるようになってきている。次節で述べるテクラの『行伝』は、こうした牧会書簡の「正統」パウロ信仰が抑えこもうとした女性たちの伝統を伝えるものと考えられるのである。

２：『テクラ行伝』と牧会書簡（ストーリー・テリングと教会父権制）

ここでは外典テクラ『行伝』と正典聖書の関係性を中心に論じた。上述のように、正典聖書ではパウロの第一コリント書の女性への沈黙と服従の要求が牧会書簡でさらに強調されたのであるが、牧会書簡と明らかに記述上の重なりを持ちつつ、同じパウロに依りつつ女性の洗礼と宣教の権利を擁護したのがテクラ『行伝』であった。本節ではデニス・マクドナルドなどの80年代のアメリカの研究者[5)]に依りつつ、同行伝の内容紹介と正典聖書との重複を指摘しつつ、口頭伝承を中心とする前者の伝統を危険視する教会上層部の側が抑圧しようとするなかで後者の書簡群が形成された可能性について指摘した。

テクラの『行伝』は二部構成から成り、第一部は小アジア中部の都市イコニオン（現コンヤ）の裕福な娘テクラが婚約者タミュリスと実母テオクレイアの追及と火刑の危機を逃れて使徒パウロを追って旅に出るまでの物語。第二部はアンティオキアの町でパウロにも否認されたテクラが信仰上の保護者で母となる皇女トリュファイナと支持者の女性群衆に助けられながら野獣刑を切りぬける物語で、この渦中でテクラは自らに洗礼を授けた。再び難を逃れたテクラは各地で人々を教え、セレウケイアで没したとされる。

物語の舞台となるイコニオンやパウロを泊めてもてなした人物オネシフォロス、それにテクラを助けたトリュファイナは正典聖書にも言及があり、明らかに同時代的な並行関係が推測される。しかし、正典ではテクラは登場せず、代わりにあちこちを歩き回って余計なおしゃべりをする「若いやもめ」（信仰を持つ独身女性）への非難が語られ、堕落に至る前の結婚が勧められる。スティーブン・デイヴィスやデニス・マクドナルドなどはこれらの記述の相互関係から、口頭伝

承を中心とする女性の伝えるキリスト教伝統が先行して存在し、それがテクラ伝承などの形を取っていたが、これを抑える必要から男性教会上層部の牧会書簡などが後から書かれることとなったと推測した。『行伝』第二部で野獣刑から解放後のテクラがトリュフィアナの家で宿泊して旅支度をする場面などは当時の「家の教会」における女性から女性への伝道の実態を反映するものと見て無理のない推論であろう。

3：『テクラ行伝』の表層と深層

2節で紹介したテクラ『行伝』に関する口頭伝承説には、しかし90年代以降直接ではないにせよ、異論も唱えられるようになった。それは歴史史料の復元方法に対する「言語論的転回」と呼ばれる一連の異議申し立てと関連するもので、史料から復元できるものは事実そのものではなく、当該の時代の文化的な型やパターンのようなものに過ぎないという考え方である。古代末期のキリスト教とジェンダーの分野ではエリザベス・クラーク[6)]がこの言語論的転回の考え方を大幅に取り入れ、それまでの社会史的アプローチで再発見されたと思われた女性像の大半は教父たちのキリスト教的モラルの必要上から創作された理想像に過ぎないとされるようになってきたのである。3節ではこの傾向のなかでテクラ信仰の復元がどのように可能であるかを考察した。以下具体的に概観してみよう。

テクラ信仰との関係でこの言語論的転回の影響を受けた研究では、ケイト・クーパーの著作[7)]がネガティヴではあるが、大変斬新なものである。彼女はキリスト教の外典史料を「ヘレニズムのロマンス」と呼ばれる同時代の異教の恋愛小説との比較のなかで見ようとした。すなわち、異教の恋愛小説では聡明な美男美女の主人公カップルがさまざまな危機を克服して最終的に結ばれて幸福な家庭を築くという物語になるのであるが、テクラ『行伝』を含むキリスト教の外典小説はこのような現世のモラルに対抗しつつ、それを超える来世のモラルを強調するプロパガンダであったというのである。この見解に従えば『行伝』の主人公はテクラではなく、彼女を現世的幸福から来世の救済に目を向けさせたパウロだということになる。

しかし、こうした見解は一面の真理を突いてはいるものの、全面的な支持を得られるものではない。クーパー説の弱点は、『行伝』最初の7節以外に論拠を挙げることができないところにある。テクラはたしかに冒頭パウロの説教に聞き惚れ、婚約者タミュリスを捨てて使徒パウロに従う。しかし、それ以降のパウロは受動的であり、第二部では完全に姿を消す。物語の焦点は信仰に目覚めたテクラの自己成長とそれを支える女性たちに移っていくのであり、教父テルトゥリアヌスが危険視したのも女性群衆の見守るなかでのテクラの自己洗礼場面である。教会側のプロパガンダ作品であるだけならば、このような場面がなぜ必要であるのかが説明されない。

また、冒頭第7節でテクラがパウロの説教にうっとりと聞き惚れる場面にしてからが、すでに物語はパウロではなく、テクラ側から見た視点で語られるように入れ替わっている。「聞き惚れる」ことは受動的ではなく主体的な行動であり、ここからテクラの自己成長の物語が出発する。さらに、細部においても上述トリュファイナの家の教会でのテクラ歓迎場面や、最終節での実母テオクレイアとの和解場面など、教会プロパガンダ説では説明しきれない場面が数多くある。このような点から、現在でもスティーブン・デイヴィスなどは80年代の口頭伝承起源説を支持して

おり[8]、本論文でも最終的な執筆段階でのプロパガンダ的な意図を認めるものの、物語の深層には多重な起源が想定され、そのなかには女性たちの口承に由来するものも含まれる可能性を示唆した。

４：古代末期におけるテクラ信仰と女性

『キリスト教証言書』との関連で『行伝』のみがクローズアップされがちであるが、テクラ信仰の最盛期は４世紀末から５世紀である。マリア崇敬の台頭や教会教義体系の確立、テクラの聖地のあったイサウリア地方の地位低下、ペルシア、イスラーム侵入の時代における同地域の戦場化などが原因で次第に衰退したように思われるが、少なくとも数世紀間は地中海規模で崇敬対象とされ、『行伝』で彼女が没したとされるセレウケイアは大規模な巡礼センターとして機能していた。論文ではテルトゥリアヌス以降の史料を列挙しつつ、テクラ信仰の古代末期における継続と発展、そのなかでの女性の役割について略述した。

テクラは４世紀以降数多くの教父に言及され、メトディオスの『シュンポシオン』では美徳を象徴する10人の女性の筆頭に選ばれ、カパドキア教父たちによっても崇敬されている。カパドキア教父のうち、後にコンスタンティノープル総主教となったナジアンゾスのグレゴリオスは４世紀後半に一時セレウケイアのテクラの墓所に隠棲したが、彼の叙述から同地がテクラの聖地（ハギア・テクラ）として巡礼を集め、繁栄していたことがわかる。このテクラの聖地、ハギア・テクラに関してはとくにふたつの史料が重要である。ひとつは５世紀に聖地内部で執筆されたとされる『聖テクラの生涯と奇蹟』[9]で、外典行伝をリメイクしてより精密なギリシア語で表現したほか、同時代（外典『行伝』の２世紀ではなく、５世紀）にテクラが起こした奇蹟譚から、聖地周辺の人々の生活、とくに女性の信仰へのかかわりについての重要な手がかりが得られる。

また、４世紀末にはヒスパニア（現スペイン）もしくは南部ガリア（現フランス）出身と推測される巡礼エゲリア[10]がこの聖地を訪れているが、これは女性自身がその感動をつづったものとして貴重であり、聖書時代以降、この段階に至っても女性たち自身の作り上げた伝統がなお途切れずに継続していることを知ることができるのである。本論文ではこれに加えてスティーブン・デイヴィスの近著[11]から、エジプトにおけるテクラ信仰と女性とのかかわりについても一部言及した。

おわりに

以上のように、本論文では古代キリスト教世界における女性たちの自立的な伝統を『キリスト教証言書』とテクラ信仰を中心にたどり、それらが古代末期まで継続していることを確認した。女性たちの伝統はそれを抑えようとするさまざまな試みを蒙りながらも、古代末期にはなおそれらの試みは貫徹しなかったのである。

今後の展望

ここで概要紹介した論文はこれまでの報告者の論稿とも重なる部分が多いが、報告者の専門とする西洋古代史以外のジェンダー史全般に関心を抱く読者に向けて初期キリスト教における女性

の伝統のひとつを開示する試みとして意義のあるものであったと考えている。

本稿での新しい試みとしては『キリスト教証言書』に関する叙述を詳しくし、テクラの『行伝』と正典のオーバーラップを意識した部分と、地中海世界におけるヘレニズムの文学伝統のなかでキリスト教の作品を位置づけて考える姿勢をさらに強めた点、また考古学の可能性を示唆した点である。本論文ではまだ明確な形で取り込むことはできていないが、ヘレニズムの文学伝統の持続と変容の問題は近年研究が急速にさかんとなりつつある分野で、そのなかでもテクラに関する一連の作品群は多くの研究者の注目を集めている。また、エジプトなど各地の考古学調査のなかでも墓標や巡礼者の遺物などから女性の行動や意識を探る試みが現れており、この点でもテクラ信仰は重要な証拠を提供するものである。

また、今期の短期研修中、テクラとそれにかかわる女性のキリスト教伝統を研究するなかで、同時期の女性たちの執筆したさまざまな別の史料、作品群の存在にも気づいてきた。

たとえば、５世紀前半の東ローマの皇妃エウドキアはその教養を生かして古代の文学作品の解題を行っている。それから、テクラ信仰が女性史にとどまらず、古代末期におけるギリシア・ローマ的文化の継続と変容の問題とも大きくかかわっていることもわかってきた。上述５世紀の『聖テクラの生涯と奇蹟』の作者は、同作品をヘロドトスやトゥキュディデスの伝統に連なる歴史書として執筆すると宣言しているが、その一方で作者はキリスト教徒であり、異教を調伏するテクラの奇蹟譚を編纂している。異教的古代からの連続性を誇示しながら、一方で熱心なキリスト教徒でもある著者によるお国自慢の著作はこの当時たくさん生み出されていた。異教からキリスト教へと移行する古代末期においてどのように文化と社会が変容していったのか、これまでの研究の継続性の上にさらに探究を進めたい。（本稿は平成21年度奈良大学研究助成による研究成果の一部である。）

１）*Acta Apostolorum Apocrypha,* ed., R.A. Lipsius et M. Bonnet, Leipzig, 1891 (*Acta Pauli et Theclae,* ed. Lipsius, 235-272). 邦訳：青野太潮訳「パウロ行伝」:日本聖書学研究所編『聖書外典偽典』第７巻『新約聖書外典』（教文館、1976）、91－113頁。

２）Tertullianus, *De Baptismo,* in : *Tertuliani Opera, Corpus Chriatianorum Series Latina,,* 1 , Turnhout, 1954, p.215. ; Tertullian, *On Baptism,* in : *The Ante-Nicene Fathers,* vol.3., *Latin Christianity: Its Founder, Tertullian,* ed. A Cleaveland Cox,(Grand Rapids, reprint. 1989) p.677.

３）フィオレンツァ、エリザベス・シュッスラー『彼女を記念して－フェミニスト神学によるキリスト教起源の再構築』（山口里子訳、日本基督教出版局、1990年）、216頁。

４）Kraemer, Ross S.. Her Share of the Blessings: Women's Religions among Pagans, Jews and Christians in the Greco-Roman World, NY, 1992, pp. 132-133.

５）Davies, Stevan., *The Revolt of the Widows: the Social World of the Apocryphal Acts,* Carbondale,1980: MacDonald, Dennis R., *The Legend and the Apostle: the Battle for Paul in Story and Canon*, Philadelphia, 1983.: Burrus, Virginia, *Chastity As Autonomy: Women in the Stories of Apocryphal Acts,* Studies in Women and Religion vol.23, Lewiston/Queenston. 1987.

６）Clark, Elizabeth A., *History, Theory, Text: Historians and the Linguistic Turn,* Cambridge,Massachusetts. 2004.

７）Cooper, Kate.,The Virgin and the Bride: Idealized Womanhood in Late Antiquity, London, 1996, pp.45-62.

８）Davis, Stephen., *The Cult of St. Thecla: A Tradition of Women's Piety in Late Antiquity,* Oxford, 2001.

９）*Vie et Miracles de Sainte Thècle : texte grec, traduction et commentaire,* par Gilbert Dagron.

10）*Égérie: journal de voyage,* par P.Maraval, SC 296, Paris, 1982.

11）Davis, Stephen., *The Cult of St. Thecla,* pp.114-48 pp.114-48 etc.